

学生による授業評価にみる特徴と課題Ⅱ

——授業改善のためにできること——

田 実 潔
後 藤 靖 宏

学生による授業評価にみる特徴と課題Ⅱ ——授業改善のためにできること——

田 実 潔 後 藤 靖 宏

目次

- I. はじめに (問題の所在)
- II. 目的
- III. 方法
- IV. 結果
- V. 考察
- VI. まとめ

〔要旨〕

2013年度に本学で行われた、学生による授業評価の最終報告内容を基に、11の質問項目結果について、学部や学科ごとに見るのではなく、全体の傾向を重回帰分析により明らかにした。分析には Amos 22.0 を使用し、データの欠損値は平均値で置換して代用した。分析の結果、授業満足度とほとんどの質問項目とはなんらかの統計学上有意な関係が見られたが、講義要項に関する質問項目（「授業は講義要項（シラバス）の趣旨と内容に沿って展開されましたか？」）についてのみ、有意な相関関係は認められなかった。これらの結果を基に「授業満足度」に関する評価モデルを提示し、授業に望む「前提条件」や教員自身による「教員側要素」および学生自身の取り組み態度等の「自助努力」が、授業評価に大きな影響を与えていることが示された。特に教員側の授業への取り組み姿勢等については、学生による授業評価に直結した要因となっていることが示された。

I. はじめに (問題の所在)

2008年に、大学学士レベルでのFDが義務化され、本学でも隔年実施の学生による授業評価が継続されている。学生による授業評価は、当然のことながら大学教員の授業改善に寄与すべき性格のものであり、研究報告も多く行われている（例えば夏目2008）。一方、文部科学省も「各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った取組を行うことが望まれること。」（高等教育局長通知 2007）として通達を各大学に出している。この通知では、大学における授業改善は、大学をあげて全学的かつ組織的に取

り組むべきものとしている。青野（2008）は教員個人ではなく大学が組織として行う「授業の内容及び方法の改善」とは何かを問いつつ、その重要な手がかりとなるのはそれでも各々の教員による「授業の内容及び方法の改善」であり、学生による授業評価やカリキュラム評価を抜きには行えない、と指摘して学生授業評価の再検討について言及している。

青野の指摘通り、授業改善のための指標となるべく学生による授業評価であるが、その有効性を否定する研究も多い（吉田2010、松谷ら2005、安岡2007）。それに対して、筆者らは隔年で実施されている北星学園大学の学生による授業評価の結果を統計的に詳細に分

析比較し、一連の研究から学生による授業評価の妥当性を検証している(田実(2008), 田実・竹原(2009), 田実・竹原・鈴木・岩本・古谷(2010), 田実・後藤・鈴木・古谷・高杉(2016))。学生による授業評価の多くは、得点化することで客観的指標としては有効であるが、評価数値が具体的に授業改善にどのように反映させていくか、についてはずっと課題となっていた。松谷ら(2005)は、授業評価アンケートの条件として、アンケート結果の分析とその検討、担当教員に対する適切なフィードバック、そして学生への情報開示を挙げているが、単なる分析結果の開示だけでは筆者らの一連の研究結果同様、授業改善への具体的な方策を提示するものではない。

このように学生による授業評価は、その有効性を認める考え方もありながら、本来の目的である授業改善に直結することがほとんど無く、如何にして学生による授業評価が機能的かつ有機的に教員の授業改善に対する有効情報を提供できるか、が大きな課題となっていた。

II. 目 的

本学では隔年で学生による授業評価を行い、その結果は教員個人に示されると共に、全体のデータを集計し度数分布としてまとめている。しかし、その読み取りについては教員個人間の差があることは否めず、せっきくの評価データが有効に活用されていないことも充分考えられる。そこで、本研究では学生による授業評価の結果から、評価項目間ごとの相関関係を分析し、その特徴から授業満足度との関連性を考察することとした。教員個人の授業改善への取組だけでなく、大学組織として授業改善への改善点や改善のための指針等が得られれば、と考えている。

III. 方 法

調査対象 北星学園大学の大学生および短期大学の学生。

調査方法 2013年度前期に開講された授業のうち、実習系科目と演習系科目を除く全ての授業において調査を行った。調査時期は授業後半であり、具体的には、全15回の授業のうち、13~15回目の任意の授業時間内の15分程度を使って、スマートフォンを使用して回答させた。その結果、のべ18244個のデータが収集された。

属 性 データの内訳は、学年別に見ると1年生(短大を含む)が8299(45.5)、2年生(短大を含む)5964(32.7)、3年生2742(15.0)および4年生が1236(6.7)であった(実数、カッコ内は%, 以下同じ)。学科別では、大学英文学科2899(15.9)、心理・応用コミュニケーション学科1700(9.3)、経済学科2429(13.3)、経営情報学科1648(9.0)、経済法学科1673(9.2)、福祉計画学科1641(9.0)、福祉臨床学科2033(11.1)、福祉心理学科1217(6.7)、短大英文学科2234(12.2)および短大生活創造学科758(4.2)、その他(不明)(11)であった。性別では、男子が6173(33.4)、女子12069(66.2)であった。

調査内容 「授業評価アンケート」の評価項目については以下の通り。

1. 属性：学科，学年，性別について，自身に該当する項目を選択させた。
2. 「1.必修」，「2....」のうち，該当するものを選択させた。複数選択可であった。
3. 教材の適切さ：「教材(教科書・配布プリント・視聴覚教材・Moodleやe-learning教材・プレゼン教材等)は適切でしたか?」という設問に1~5で回答した(以下，4~11同)。
4. 授業の環境維持：「授業担当者は授業中の良好な環境維持(Ex. 私語や迷惑行為

表1. 本研究で用いた質問項目と評価方法

質問内容	項目	評価方法
1. 属性	学科 英文学科(大学) 心理・応用コミュニケーション学科 経済学科 経営情報学科 経済法学科 福祉臨床学科 福祉計画学科 福祉心理学科 英文学科(短大) 生活創造学科	1つを選択
	学年: 1~4	1つを選択
	性別: 男女	いずれかを選択
2. 履修の理由	必修だから シラバスで興味をもって 先輩のすすめで	複数選択可
3. 教材の適切さ	「教材(教科書・配布プリント・視聴覚教材・Moodleやe-learning教材・プレゼン教材等)は適切でしたか?」	5段階(1:適切ではない~5:とても適切である)
4. 授業の環境維持	「授業担当者は授業中の良好な環境維持」(Ex. 私語や迷惑行為等への対応)に適切に対応しましたか?」	5段階(1:適切に対応しなかった~5:適切に対応した)
5. 講義要項	「授業は講義要項(シラバス)の趣旨と内容に沿って展開されましたか?」	5段階(1:展開されなかった~5:展開された)
6. 興味・関心への高まり	「その領域への興味、関心が高まりましたか?」	5段階(1:高まらなかった~5:高まった)
7. 授業の工夫	「授業の内容を理解できるような工夫や進め方がされていましたか?」	5段階(1:されていない~5:されていた)
8. 教員の意欲	「授業担当者の伝えようとする気持ちや意欲は感じられましたか?」	5段階(1:感じられない~5:感じられた)
9. 自分の出席状況	「あなた自身の授業への出席状況は良かったですか?」	5段階(1:良くなかった~5:良かった)
10. 自分の取り組み態度	「必要な場合の予習・復習や授業時の集中など、あなたの取組態度は意欲的でしたか?」	5段階(1:意欲的ではない~5:意欲的であった)
11. 授業の満足度	「総合的に判断して、この授業は満足できるものでしたか?」	5段階(1:満足できない~5:満足できた)

等への対応)に適切に対応しましたか?」

5. 講義要項: 「授業は講義要項(シラバス)趣旨と内容に沿って展開されましたか?」
6. 興味・関心への高まり: 「その領域への興味、関心が高まりましたか?」
7. 授業の工夫: 「授業の内容を理解できるような工夫や進め方がされていましたか?」
8. 教員の意欲「授業担当者の伝えようとする気持ちや意欲は感じられましたか?」
9. 自分の出席状況: 「あなた自身の授業への出席状況は良かったですか?」
10. 自分の取り組み態度: 「必要な場合の予習・復習や授業時の集中など、あなたの取組態度は意欲的でしたか?」
11. 授業満足度: 「総合的に判断して、この授業は満足できるものでしたか?」

質問項目と評価方法について表1に示した。

IV. 結果

本研究で得られた調査データに基づき、授業の満足度にどのような要因が影響を与えているのかを検討した。具体的には、「3. 教材の適切さ」、「4. 授業の環境維持」、「5. 講義要項」、「6. 興味・関心への高まり」、「7. 授業の工夫」、「8. 教員の意欲」、「9. 自分の出席状況」および「10. 自分の取り組み態度」を独立変数とし、「11. 授業満足度」を従属変数として重回帰分析を行った。分析には Amos 22.0 を使用した。なお、データの欠損値は平均値で置換して代用した。

重回帰分析の結果、「7. 授業の工夫」および「8. 教員の意欲」0.1%水準で有意な影響を与えていた。また、「3. 教材の適切さ」と「4. 授業の環境維持」が1%水準で有意に影響を与えていた。さらに、「9. 自分の出席状況」、「10. 自分の取り組み態度」および「興味・関心への高まり」が5%水準

表 2：重回帰分析結果

説明変数	B	SE B	β
教材の適切さ	0.61	0.15	.19**
環境	0.33	0.14	.18**
講義要項	0.18	0.10	.05
興味・関心への高まり	0.29	0.14	.13*
授業の工夫	0.59	0.13	.41***
教員の意欲	0.55	0.13	.33***
自分の出席状況	0.30	0.12	.14*
自分の取り組み態度	0.22	0.14	.13*

R2

基準変数：授業満足度

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

で有意に影響を与えていた。「5. 講義要項」は有意な影響は与えていなかった。結果を表2に示す。

V. 考 察

分析結果から、授業評価における満足度について、図式化した(図1)。授業満足度を構成している要因としては、「3. 教材の適切さ」、「4. 授業の環境維持」による前提要

因と、「6. 興味・関心への高まり」の単独要因、並びに「7. 授業の工夫」、「8. 教員の意欲」といった教員側の要素要因、「9. 自分の出席状況」、「10. 自分の取り組み態度」からなる自助努力要因が関与していると思われる。特に有意水準が高かった教員側要因については、林(2009)が指摘しているように、学生による授業評価の結果と教員自身による自らの授業評価の結果を比較分析し、教員が直観的に「うまくできた」あるいは「ダメだった」と感じる(評価する)授業については、ほぼ学生による授業評価と一致する傾向と共通している。「3. 教材の適切さ」、「4. 授業の環境維持」などの前提要因や学生側の「9. 自分の出席状況」、「10. 自分の取り組み態度」といった自助努力要因も授業満足度と関連していることから、教員としては、学生が望むような授業内容を設定し、教材の工夫や学生が授業を受けやすい環境作りなどに心がけることが大切であろう。そのことにより、また学生側の授業参加態度等の自助努力

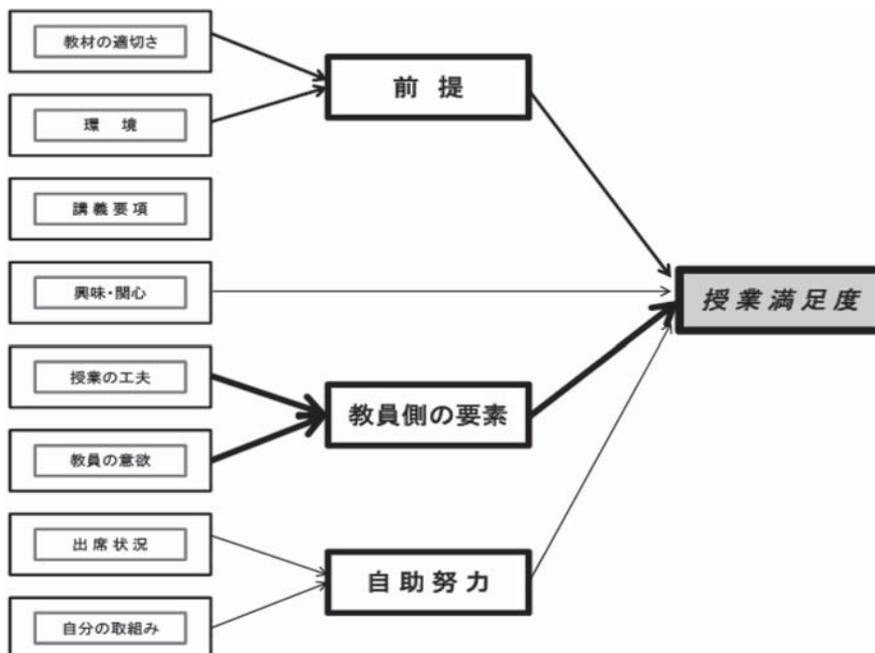


図1 「授業満足度」の評価モデル

要因も進むことが考えられ、相互的に良い循環に好転していくのではないだろうか。田中ら（2003）は、教員が良い授業を展開していくことが学生の受講態度につながるという因果関係を指摘しているが、まさしく正鵠であろう。一方、講義要項（シラバス）は授業満足度を説明できる直接的な要因とはなっておらず、講義要項の内容だけでは情報としても授業満足度を規定するものとしても充分ではないのかもしれない。

Ⅵ. まとめ

中教審によれば、大学に対してもアクティブ・ラーニングの導入など学生の参加型授業の導入を求めている。北星学園大学で進んでいる少人数授業をはじめとして、今後はアクティブ・ラーニングなどの授業スキルを大学教員も身につけていく必要があるであろう。後数年すれば、高校でアクティブ・ラーニングになじんできた学生が入学してくることが予想され、それまでに我々大学教員もしっかり研鑽を積むべきであろう。また本研究では、講義要項（シラバス）と授業満足度との相関性が示されなかったが、授業科目選択の情報提供として、講義要項は大切なものであり、授業満足度とは直接結びつかなくても、学生に選択される授業としてアピールしていくことも考えられるかもしれない。

〔謝辞〕

本研究は、北星学園大学2015年度プロジェクト研究による研究助成を受けた研究成果である。北星学園大学に感謝する次第である。

〔文献〕

夏目達也（2008）：FD実施義務化が提起しているもの－諸外国との比較による若干の知見－。大学教育学会2008年度課題研究集会要旨集，38-39.

文部科学省大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について（2007）：文部科学省 高等教育局長通知（文化高第281号，平成19年7月31日
青野透（2008）：大学設置基準における「授業の内容及び方法の改善」が意味するもの。第11回日本高等教育学会Ⅱ-7部会，120-121.
吉田雅章（2010）：学生による授業評価は廃止すべき。第16回大学教育研究フォーラム，86-87.
松谷満・平井松牛・佐竹昌之・桑折範彦（2005）：全学共通教育の現状と課題-学生による授業評価アンケート調査の分析から-。大学教育研究ジャーナル，Vol 2，13-25.
安岡高志（2007）：学生による授業評価の進展を探る。京都大学高等教育研究 Vol13，73-87.
田実潔（2008）：学生による授業評価と授業改善-学生評価の再分析から-。第30回大学教育学会発表論文集，106-107.
田実潔・竹原卓真（2009）：学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究（Ⅱ）-学生が望む授業づくりに向けて授業評価アンケートの分析から-。北星学園大学社会福祉学部論集，vol46，65-72.
田実潔・竹原卓真・鈴木剛・岩本一郎・古谷次郎（2010）：学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究（Ⅲ）-過去3度のアンケートの縦断分析から（2003～2007）-。北星学園大学経済学部北星論集，vol49(2)，1-16.
田実潔・後藤靖宏・鈴木剛・古谷次郎・高杉巴彦（2016）：学生による授業評価にみる特徴と課題。北星学園大学経済学部北星論集，Vol55，NO. 2，67-73.
松谷満・平井松牛・佐竹昌之・桑折範彦（2005）：全学共通教育の現状と課題-学生による授業評価アンケート調査の分析から-。大学教育研究ジャーナル，Vol 2，13-25.
田実潔・鈴木剛・岩本一郎・古谷次郎・後藤靖宏（2014）：授業改善に直結する学生授業評価の検討（Ⅱ）-新学生授業評価アンケート調査の策定に向けて-。北星学園大学社会福祉学部北星論集，Vol51，81-90.
林創（2009）：学生の授業評価と教員自身の授業評価の一致と不一致。第15回大学教育研究フォーラム，40-41.
田中あゆみ・藤田哲也（2003）：大学生の達成目標と授業評価，学業遂行の関連。日本教育工学会論文誌，vol 27（4），397-403.

